

教 育 研 究 業 績 書		
2023年 5月 1日		
氏名 坂間伊津美 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学	生涯発達看護学	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) ディベートを用いた授業の実践	平成9年 ～平成13年3月	学生が課題の理解を深め、表現力を高めることを目的として、母性看護学の授業に導入していたディベートの指導を一部担当した。学生の情報収集・分析能力及び討議能力の向上に効果をあげていた。
2) PBL (Problem-Based Learning) を導入した授業の実践	平成10年 ～平成13年3月	助産学での少人数授業に取り入れていたPBLに関して、産褥期および新生児期における助産ケアの部分を担当した。学生には問題解決型思考と有効な学習のための手段の習得がみられた。
3) 問題発見・探究力の向上を目指した実習の実施	平成10年 ～平成16年3月	母性看護学実習の一部として、リプロダクティブ・ヘルス/ライツに関する健康課題を学生自らが発見し、探究する力をつけるための実習を行った。病院実習は周産期看護を中心として行うが、この実習は女性の生涯を通しての健康支援について幅広く考察する上で有効であった。
4) 学生同士の共同学習を活用した授業の実践	平成13年 ～現在	母性看護学教育では、リプロダクティブ・ヘルス/ライツや看護過程、健康教育に関して、また助産学教育では助産技術に関してグループ学習を導入してきた。課題に対する学生個々の理解が深まるとともに、グループスキルが向上したと学生からの評価を得ている。
5) 体験学習やロールプレイ、視聴覚教材を活用した授業の実践	平成13年 ～現在	生活体験の少ない学生が、妊娠・出産・育児等に関する現象をイメージし、身近な看護の対象として捉えることができるように、①妊婦体験、②父親や母親へのインタビュー、③母性看護技術演習、④産褥期の看護に関するロールプレイなど、能動的に学習する機会を多く設け、また、動画教材も活用してきている。
6) ミニツッペーパーによる授業評価	平成14年 ～現在	毎回の授業後、ミニツッペーパーにより、学生の授業に対する興味や理解、感想や疑問などを確認し、授業内容や方法の工夫に反映させている。学生の感想や疑問については次回の授業でフィードバックしている。
2 作成した教科書、教材		
1) 教材作成	平成9年1月	助産学講座基礎助産学概論「社会的な接近法としての理論」分担執筆
	平成12年9月	看護観察のキーポイントシリーズ母性Ⅱ「子宮内膜症」「性感染症」分担執筆
	平成17年6月	放送大学印刷教材 母性看護学（'05）「妊娠期の看護Ⅰ・Ⅱ」分担執筆
	平成18年3月	臨床助産師必携2版「女性のライフサイクルと健康支援」分担執筆
	平成22年7月	放送大学印刷教材 母性看護学（'10）「生殖のメカニズムと性の分化」「妊娠期の看護Ⅰ・Ⅱ」分担執筆

	平成22年7月	ひとりで学べる看護研究「調査研究」「疫学研究」「実験研究」「データ収集と分析 母性看護研究（調査研究）」分担執筆
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 授業評価	平成15年前期	神戸大学医学部保健学科教務学生委員会による「学生による授業評価アンケート」の結果（5点満点中）において、①授業及び担当教員について：4.60（学科平均3.83）、②授業を受けた成果：4.51（学科平均3.82）との評価を得た。
	平成21年3月	茨城キリスト教大学授業改善委員会による「平成21年度学生による授業評価」（50点満点中）において、主担当3科目は46.7～48.0（大学平均42.9）の評価を得た。
	平成23年前期	茨城キリスト教大学授業改善委員会による「学生による授業評価」（授業運営45点満点中）において、前期主担当1科目は41.1（大学平均38.5）の評価を得た。
	平成24年3月	茨城キリスト教大学授業改善委員会による「学生による授業評価」（授業運営45点満点中）において、前期主担当1科目は41.5（大学平均38.8）、後期主担当1科目は38.0（大学平均38.8）の評価を得た。
	平成25年3月	茨城キリスト教大学授業改善委員会による「学生による授業評価」（授業運営45点満点中）において、前期主担当1科目は39.8（大学平均38.9）、後期主担当2科目は40.7、43.6（大学平均39.5）の評価を得た。
	平成26年3月	茨城キリスト教大学授業改善委員会による「学生による授業評価」（授業運営45点満点中）において、後期主担当2科目は39.5、41.9（大学平均39.5）の評価を得た。
	平成27年3月	茨城キリスト教大学授業改善委員会による「学生による授業評価」（授業運営45点満点中）において、前期主担当2科目は38.8、42.1（大学平均39.0）、後期主担当2科目は39.4、45.0（大学平均39.7）の評価を得た。
	平成28年前期	茨城キリスト教大学授業改善委員会による「学生による授業評価」（授業運営45点満点中）において、前期主担当1科目は41.5（大学平均39.6）の評価を得た
	令和3年	常磐大学FD委員会による「授業アンケート」において、主担当科目の授業評価に係る平均点は、4点満点中、「母性看護援助」3.00～3.52、「看護展開導入演習」3.21～3.50、「看護課題の探究」3.22～3.47、「統合実習」3.3～3.7、「母性看護学実習」3.32～3.84の評価を得た。
	令和4年	常磐大学FD委員会による「授業アンケート」において主担当科目の授業評価に係る平均点は、4点満点中、「母性看護援助」はすべて3.5以上、「母性看護学実習」は1項目を除き3.6以上で、「総合的に考えてこの実習に満足できた」は3.78、「教員は学生の理解や反応を見ながら指導していた」は3.81の評価を得た。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		なし
5 その他（教育活動上特記すべき事項）		なし

職務上の実績に関する事項				
事項		年月日	概要	
1 資格, 免許 看護婦免許 助産婦免許 保健婦免許		昭和61年5月16日 昭和62年5月11日 平成6年6月17日	第571376号 第88476号 第75847号	
2 特許等			なし	
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 茨城県立医療大学における附属病院看護師、附属病院看護部情報委員としての取り組み		平成10年 ～平成13年3月	茨城県立医療大学において、ユニフィケーションの一環として附属病院看護師の兼務辞令を受け、リハビリテーション病棟で看護実践を行った。また、附属病院看護部情報委員として、看護情報システムの導入・管理に関わり、職員への教育活動にも取り組んだ。	
4 その他 競争的研究資金の獲得状況 1) 文部科学省科学研究費補助金 奨励研究(A)		平成9～10年度	育児ストレインの構造と要因に関する研究～よりよい育児支援にむけて～ (研究課題番号09770269) (研究代表者)	
2) 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)		平成9～11年度	排尿の体位依存性に関する研究～超音波画像診断法を用いて～ (研究課題番号09470535) (研究分担者)	
3) 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C)		平成15～17年度	現代の母親の抱える育児不安・ストレス要因に対する育児グループの効果に関する研究 (研究課題番号15592317) (研究分担者)	
4) 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C)		平成15～16年度	“妊娠期、及び育児・早期における母親の育児不安予測アセスメント・ツール”の開発 (研究課題番号15592266) (研究分担者)	
5) 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C)		平成16～17年度	乳幼児を持つ母親の就業継続過程における葛藤・ストレスモデルの構築 (研究課題番号16592145) (研究代表者)	
6) 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)		平成23～25年度	第2子妊娠中の母親を対象とした第1子理解のための子育てクラスの有効性の検討 (研究課題番号23593325) (研究分担者)	
7) 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)		平成24～26年度	母性看護学における看護実践能力を高めるための教育方法の開発 (研究課題番号24593242) (研究代表者)	
8) 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)		平成28～30年度	大学生ピアおよびITを活用した高校生のデートDV予防支援プログラムの開発・評価 (研究課題番号16K12329) (研究分担者)	
9) 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)		令和2～5年度	子育てに関するヘルスリテラシーの獲得を基盤とした子育て支援モデルの構築 (研究課題番号20K11000) (研究分担者)	
研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 助産学講座基礎助産学概論	共著	平成9年1月	医学書院	第4章5節「社会的な接近法としての理論」で、社会の動きや対象のニーズに沿った助産ケアを展開するためには、助産婦がマーケティング理論やアサーティブなコミュニケーション技術を学習していく必要があると解説した。 前原澄子、今関節子、関根龍子、村井文江、山本弘江、小松美穂子、太田尚子、佐藤直美、加納尚美、坂間伊津美 p. 153-156

2 看護観察のキーポイント シリーズ母性Ⅱ褥婦/新生児 /婦人科疾患	共著	平成12年9月	中央法規	婦人科疾患（第5章）のうち、「子宮内膜症」に関して、定義や発症のメカニズム、発生部位と症状、診断・治療を概説し、看護の基本となる観察の視点を説明するとともに、症状をコントロールしながら日常生活を快適に過ごす必要性を述べた。また、特に若年者で増加傾向にある「性感染症」について、種類と症状・診断・治療について述べ、身体的・心理的観察のポイントを解説した。 江守陽子、桑名佳代子、宮腰由紀子、浅井美千代、渡辺尚子、渡辺尚子、山下朱美實、 <u>坂間伊津美</u> 、加納尚美、長井栄子（執筆章順） p. 353-360、364-369
3 放送大学教材母性看護学 （' 05）	共著	平成17年6月	放送大学教育振興会	第5章「妊娠期の看護Ⅰ」では、妊娠期の経過と母体の身体・心理・社会的特徴、胎児の発育について概説し、妊娠期のアセスメントの視点を述べた。第6章「妊娠期の看護Ⅱ」では、妊婦健康診査、妊娠中の生活とマイナートラブル等に関する保健指導、妊娠期の心理・社会的健康、分娩準備教育について述べ、妊婦とその家族に対するケアを解説した。 吉沢豊子子、佐藤喜根子、 <u>坂間伊津美</u> 、跡上富美、成田伸、近藤好枝、森恵美、小松美穂子（執筆章順） p. 70-108
4 臨床助産師必携 生命と 文化をふまえた支援第2版	共著	平成18年3月	医学書院	第4章4節「多様な環境で生活する母性・女性への健康支援」でさまざまな生活スタイル、家族の女性への支援を概説した。職業形態別では給与所得世帯、自営業世帯、共働き世帯別に職業が妊娠・分娩・産褥に及ぼす影響、必要な保健指導を解説した。また、家族形態別に、それぞれの現状と周産期で考慮しなければならない特性、保健指導を述べた。 安藤広子、井上京子、今関節子、牛ノ濱幸代、牛之濱久代、江守陽子、大石時子、小笹由香、蛸崎奈津子、我部山キヨ子、川島広江、川瀬浩子、近藤好枝、齋藤益子、 <u>坂間伊津美</u> 、他20名（五十音順） p. 75-90
5 放送大学教材母性看護学 （' 10）	共著	平成22年7月	放送大学教育振興会	第2章「生殖のメカニズムと性の分化」では、女性生殖器の形態と機能、性周期、卵子と精子の発生から受精・着床までのメカニズムを解説した。また性分化のしくみと性分化異常症について述べた。第3章「妊娠期の看護Ⅰ」、第4章「妊娠期の看護Ⅱ」では、前回執筆分を改訂した。 小松美穂子、 <u>坂間伊津美</u> 、跡上富美、島田智織、近藤好枝（執筆章順） p. 17-69
6 ひとりで学べる看護研究	共著	平成22年7月	照林社	「研究方法の特徴と展開」の章において、「調査研究」「疫学研究」「実験研究」についてそれぞれの特徴と方法、研究上で注意すべきことを概説した。また、「データ収集と分析 母性看護研究（調査研究）」では、実際の学生の調査研究論文をもとに、研究の進め方やまとめ方が理解しやすいように講評を述べた。 山口瑞穂子、石川ふみよ、坂江千寿子、 <u>坂間伊津美</u> 、六角僚子（執筆章順） p. 16-33、74-79、121
(学術論文) 1 育児ストレスの規定要因に関する研究 (学位論文)	単著	平成8年3月	東京大学大学院医学系研究科保健学専攻修士論文	保健医療の専門家が援助や介入の必要性を感じている育児上の問題についてその内的構造と規定要因を検討するため450名に質問紙調査を行った（有効回収率82.2%）。育児上の問題の中から、4つの下位尺度から構成される育児ストレスという概念を抽出し、その高低に職業の有無、生育家族へのイメージ、夫からのサポート感が関連することを明らかにした。

2 病院における排泄環境に関する研究（査読付）	共著	平成9年3月	茨城県立医療大学紀要 p. 71-79	入院による生活変化が排泄に与える影響を明らかにするために入院患者37名に面接聞き取り調査を行った。トイレ環境の不備や床上排泄による問題点を明らかにした。 巻田ふき、板垣昭代、坂間伊津美、金久悦子、奥宮暁子、小松美穂子、初田真知子、呉勁、栗山尚子 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
3 母子看護学実習におけるリプロダクティブ・ヘルス／ライツに関する教育（査読付）	共著	平成11年3月	茨城県立医療大学紀要 p. 85-91	女性のリプロダクティブ・ヘルス／ライツに関するテーマを学生自ら選定・探求しレポートにまとめる実習を4年次に取り入れた成果について検討するため、平成10年度4年生（44名）のレポートについて分析した。自主性、積極性に富む学生の学習姿勢がみられ、学習者主体の教育方法として有効性を示した。またファシリテーターとなる教員の役割の重要性を確認した。 坂間伊津美、太田尚子、加納尚美、小松美穂子、山本弘江
4 育児ストレスの規定要因に関する研究（査読付）	共著	平成11年4月	日本公衆衛生雑誌 p. 250-262	修士論文の一部を加筆・修正し投稿した。 坂間伊津美、山崎喜比古、川田智恵子
5 乳幼児を持つ母親の心理的問題と疲労－阿見町調査から－（査読付）	単著	平成12年3月	茨城県立医療大学紀要 p. 99-107	都市部以外の地域における母親の育児上の問題と蓄積疲労状態を明らかにするために450名に郵送調査を行った（有効回収率69.3%）。東京都内での調査と同様、育児ストレスの概念を抽出した。また半数以上の訴え率を示した症状は頭痛、肩こり、易疲労、イライラであり、育児ストレス、A型行動タイプ度、夫からのサポート感の高さとの関連を確認した。
6 茨城県における助産婦活動および需給に関する検討（査読付）	共著	平成12年3月	茨城県立医療大学紀要 p. 139-147	今後の助産師の養成数と教育内容を検討するために、茨城県内の保健医療施設185施設に郵送調査を行った（有効回収率54.1%）。現行の養成数は新規採用の助産師数を十分には満たしておらず、地域母子保健分野も含めた幅広い助産師活動を行える人材の養成に向けて量・質ともに検討する必要性を述べた。 加納尚美、小松美穂子、坂間伊津美、杉本敬子、太田尚子 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
7 超音波画像による成人女性の残尿量測定方法及び体位依存性に関する研究（査読付）	共著	平成12年6月	母性衛生 p. 299-306	疾病や障害により床上排泄を余儀なくされた場合にスムーズに排尿を行える条件を明らかにするため、健康な成人女性6名を対象に超音波画像診断を用いた実験的検討を行った。心身の苦痛が少なくかつ残尿が少ない排尿体位とは45～60度の上体挙上の体位であることを示し、膀胱内尿量測定には超音波画像診断装置が非常に有用であることを述べた。 初田真知子、呉勁、巻田ふき、坂間伊津美、板垣昭代、奥宮暁子、小松美穂子 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
8 小・中・高校生の対児感情に関連する要因についての検討－ソーシャル・サポートの概念に基づいて－（査読付）	共著	平成12年12月	母性衛生 p. 420-428	思春期各期の男女の対児感情に関連する要因を検討するため、1631名の小・中・高校生を対象に質問紙調査を行った（有効回収率99.4%）。対児感情は親密性や信頼性を育む人間関係、性的アイデンティティー、養育・養護の機会の諸要因と関連があることを明らかにした。 また、思春期の時期や性別による対児感情の違いを示した。 喜多淳子、坂間伊津美、清水美穂、岩橋正子、石川直美、岡田公江 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）

9 育児期の母親の自我状態、育児不安、及び自己評価（第1報）：エゴグラム・プロフィール・パターンと育児不安、及び自己評価との関連（査読付）	共著	平成13年12月	母性衛生 p. 806-813	母親の育児不安や育児ストレスを予防・軽減させる看護援助への示唆を得る目的で、1～24ヶ月児をもつ母親637名を対象とした質問紙調査を行い、エゴグラム・プロフィール・パターンの特徴について検討した（有効回収率69.3%）。エゴグラムの分布を明らかにし、5つのエゴタイプと育児不安・自己評価の高低との関連を示した。 喜多淳子、田中恵子、坂間伊津美、中山佳代子 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
10 育児期の母親の自我状態、育児不安、及び自己評価（第2報）：エゴグラム・サブカテゴリー得点による育児不安、自己評価の予測・説明（査読付）	共著	平成13年12月	母性衛生 p814-819	第1報の調査から、エゴグラム・サブカテゴリー得点による育児不安・自己評価に対する予測・説明を検討した。育児不安の低い母親はAC得点が低く、自己評価の高い母親はNP得点・A得点が高くかつAC得点が低いことを明らかにした。また自己評価の高低を予測する変数はNP得点、育児不安の高低を予測する変数はAC得点であることを示し、母親の自我状態を予め把握することの有効性に関して述べた。 喜多淳子、田中恵子、坂間伊津美、中山佳代子 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
11 発達上の問題をもつ子どもの乳幼児検診システムの現状と問題点 医師へのアンケートから（査読付）	共著	平成14年6月	茨城県立病院医学雑誌 p. 51-58	発達上の問題をもつ乳幼児の検診における現状を明らかにするため、茨城県内の小児科医722名を対象とした質問紙調査を行った（有効回収率32.6%）。茨城県内においては、発達をフォローアップするための検診制度の普及が遅れており、発達上の問題をもつ子どもへの対応が個々の医師や保健師に任されているとの問題が明らかとなった。 絹笠英世、岡田祐輔、新健治、佐藤秀郎、板垣昭代、前田和子、坂間伊津美、三河千恵、佐々木悦子、大槻解子 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
12 女子大学生の月経随伴症状とライフスタイルとの関連	共著	平成16年12月	茨城キリスト教大学紀要 p. 193-203	青年期女性の月経随伴症状の発現状況と対処行動を明らかにし、また月経随伴症状とライフスタイルとの関連を明らかにする目的で女子大学生191名を対象とした質問紙調査を行った（有効回収率54.5%）。月経前変調度は過飲食、冷え性、ストレスと関連し、月経中変調度は冷え性、ストレスと関連しており、ライフスタイル全般の改善を図る教育や工夫の必要性を明らかにした。 坂間伊津美、楠見由里子
13 母性看護学におけるグループ学習の体験（査読付）	共著	平成18年12月	茨城県母性衛生学会誌 p. 20-27	リプロダクティブ・ヘルスを題材としたグループ学習における学生の体験を明らかにし、母性看護学の授業のあり方を検討することを目的として、学生76名の感想を質的に分析した。学生の主観的体験は、「グループダイナミクスの認識」「伝達方法の努力」「学習方法の確認」の3つに分類されることを明らかにし情報の利用方法などの課題を述べた。 渋谷えみ、坂間伊津美 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
14 乳児をもつ母親の育児不安と育児情報の利用意識との関連（査読付）	共著	平成22年2月	茨城キリスト教大学看護学部紀要 p. 11-15	乳児を育てる母親の育児不安を明らかにし、育児情報利用に対する母親の意識との関連を検討することを目的として、母親347名を対象に質問紙調査を行った（有効回収率75.2%）。6割の母親が何らかの不安を抱いており、一方通的な育児情報への依存意識の高さと育児不安が関連することを明らかにした。 坂間伊津美、松田宣子

15 看護職の大学院への進学ニーズに関する調査（査読付）	共著	平成22年2月	茨城キリスト教大学看護学部紀要 p. 71-77	看護系大学院への進学ニーズを明らかにする目的で、茨城県内の看護職者と茨城キリスト教大学卒業生485名を対象としてアンケート調査を行った（有効回収率62.7%）。進学希望率は38.5%であり、志望領域はがん看護、看護管理、看護教育の順であった。進学時の問題として、経済面、仕事との両立が挙げられ、勤務施設と大学双方からの支援の必要性が明らかとなった。 小澤尚子、坂江千寿子、 <u>坂間伊津美</u> 、山本真千子、小松美穂子、小玉敏江、津田茂子、柳澤尚代 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
16 産後2～5か月の母親の母乳育児継続に関する要因（査読付）	共著	平成22年6月	茨城県母性衛生学会誌 p. 17-24	産後2～5か月の母親の母乳育児を継続させた要因と母親が退院後に望むケアを明らかにする目的で、2～5か月児をもつ母親141名を対象としてアンケート調査を行った（有効回収率81.6%）。母乳群は母乳育児への意欲が有意に高く、子どもが泣き止まない、母乳分泌不足を感じるという心配事・困り事が有意に少なかった。また夫や友人のサポートがある群では、母乳育児を断念したいと思った経験が有意に少なく、母乳への意欲を高める援助や心配事への早期介入に加え、家族を含めた母乳育児の支援の必要性を明らかにした。 <u>柴田奈緒</u> 、 <u>坂間伊津美</u> （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
17 早期看護体験実習を通じた学びと効果—実習後のレポートに記述された内容の分析から—（査読付）	共著	平成23年2月	茨城キリスト教大学看護学部紀要 p. 55-62	実習で学生が体験した「困難な状況、努力したこと、成長・変化したととらえたこと」を明らかにし、実習のあり方を検討することを目的として、学生71名分のレポート内容を質的に分析した。困難な状況は「コミュニケーションをとること自体の難しさ」など4カテゴリー、努力したことでは「実習目標を意識した行動」など3カテゴリー、変化・成長したことでは「次へのステップアップを考え始めるきっかけ」など3カテゴリーを明らかにした。この時期の学生の困難さを理解しながら、体験の意味づけを行い次のステップへ進めるような関わりの必要性について考察した。 渋谷えみ、池内彰子、 <u>坂間伊津美</u> 、松澤明美、栗原加代、坂江千寿子、津田茂子、藤村真弓、小松美穂子 （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）
18 高校生の性に関する意識—男女の考え方の違いから性教育のあり方を考える—（査読付）	共著	平成23年3月	茨城県母性衛生学会誌 p. 12-15	高校生男女の性についての考えを明らかにし、より良い性教育を検討することを目的として、高校2年生222名を対象にアンケート調査を行った（有効回収率98.6%）。性に関する知識は全体的に不足しており、性行為についての価値観には男女で有意差がみられた。避妊の意思は殆どが伝えられるが、伝えられない割合は、女子の方が多かった。具体的な性知識の提供やピアエデュケーションの活用、異性との交際経験の段階に応じた教育と避妊の意思を女子が主体的に伝えられるための教育が必要であることを考察した。 <u>岡地初奈</u> 、 <u>坂間伊津美</u> （共同研究にて本人担当部分抽出不可能）

19 母性看護学における看護実践能力を高めるための教育方法の検討ーロールプレイングを取り入れた演習の評価ー (査読付)	共著	平成25年7月	母性衛生 p. 379-386	母性看護学における看護実践能力を高めるために、看護過程の学習にロールプレイングを取り入れる方法が有効かを検討する目的で、看護大学生87名を対象にレポートの分析および質問紙調査を行った。ロールプレイングは「対象理解の深化」を促すとともに「母性看護実践方法理解の拡大」につながり、「理論と実践の統合の達成」をもたらしていた。また、「研鑽し続ける態度の強化」の機会となっており、看護のイメージ化や実際の理解に役立つだけでなく、自己の気づきを促進する学習方法であることが示唆された。 礪山あけみ、坂間伊津美、渋谷えみ、小松美穂子 (共同研究にて本人担当部分抽出不可能)
20 看護系大学生の卒業研究を遂行する過程における学習体験 (査読付)	共著	平成27年3月	日本看護学教育学会誌 p. 63-73	看護系大学の卒業研究を遂行する過程における学習体験を明らかにすることを目的として、卒業研究を終了した学生にフォーカスグループインタビューを行った。4組計20名のインタビューから175コード、16サブカテゴリーが得られ、「研究意義や方法に対する知識や態度の習得」「研究課題の模索と明確化」「試行錯誤による研究の実施」「研究に対する興味・関心の向上」の4カテゴリーが抽出された。卒業研究は看護の専門性や価値について説明できる能力や科学的根拠を探求するための批判的能力を養う上で有効な教育方法であることが示唆された。 礪山あけみ、渋谷えみ、坂間伊津美 (共同研究にて本人担当部分抽出不可能)
21 褥瘡の復古に関して学生が看護実践能力を獲得するための映像型教材の開発 (査読付)	共著	平成27年3月	茨城キリスト教大学看護学部紀要 p. 63-70	褥瘡の復古に関して学生が看護実践能力を獲得するための映像型教材を開発する過程について報告した。紙上患者事例をもとに実習の流れに沿った3場面のシナリオを作成し、18分の映像を撮影・編集した。思考を促す問いかけや学習ポイントを挿入し、学生が苦手と感じやすいコミュニケーションも含めた。褥瘡への看護実践を視覚化した映像を用いることで、看護過程の展開を一連の流れとして理解すること、看護方法を具体的にイメージできることにつながるものと推察できた。 礪山あけみ、坂間伊津美、渋谷えみ、小松美穂子 (共同研究にて本人担当部分抽出不可能)
22 新たに孫を迎える祖父母に対する役割獲得に向けた準備教育プログラムの有効性の検討 (査読付)	共著	平成28年3月	茨城県母性衛生学会誌 p. 5-11	新たに孫を迎える祖父母に対する役割獲得に向けた準備教育プログラムの有効性を検討することを目的として、祖父3名、祖母9名を対象として教育介入前後に質問紙調査を行った。孫を迎えるための知識や心構えに関する内容40項目のうち、13項目の介入後得点が増加し、考案したプログラムは、祖父母の役割獲得に向けての教育プログラムとして一定の効果が示唆された。 礪山あけみ、渋谷えみ、坂間伊津美 (共同研究にて本人担当部分抽出不可能)
23 健康問題としての高校生・大学生のデートDVの現状と予防の検討 (査読付)	共著	平成31年3月	常磐看護学研究雑誌 p. 7-16	健康行動の視点からデートDVの程度も含め高校生・大学生におけるデートDVの現状と予防を明らかにすることを目的として、既存の31文献・3調査を分析対象として検討を行った。交際経験者のうち、4人に1人程度にデートDV行為があり、1割にデートDVの状況があることが明らかとなった。また、男女に関係なく被害者・加害者になること、双方向性でデートDVがされている可能性、デートDV行為として認識されていない行為の被害・加害経験の多さなど、エスカレートする要因が複数存在した。予防として、デートDV行為をしないに加え、気づいてやめる、相談して解決することの必要性が示された。 村井文江、坂間伊津美、猿田和美 (共同研究にて本人担当部分抽出不可能)

24 新生児の泣きに関する教育が泣き声聴取時の認知・心理・生理的反応に及ぼす影響－女子大学生を対象とした調査から－	共著	令和元年8月	Health Sciences p. 201-211	新生児の泣きに関する教育が、泣き声聴取時の認知・心理・生理的反応に及ぼす影響を検討することを目的として、大学生女子18名を無作為に介入群、対照群に割り付け、教育介入の前後において質問紙調査および新生児の泣き声聴取時の生理的指標の変化量の測定を行った。教育介入は、パンフレットを用いた新生児の泣きに関する説明と、泣きへの対処方法の練習で構成し約30分間で実施した。二元配置分散分析の結果、生理的指標、状態不安に有意な変化は認められなかったが、教育介入は、泣きへの理解、泣きへの対処可能感を有意に高め、泣きに対する認知を変化させる有用な手段であることを示した。 坂間伊津美、加納尚美、川野道宏
25 新生児の泣きに対する母親のストレス軽減と対処能力向上をめざした妊娠期における教育介入の効果 (学位論文)	単著	令和2年3月	茨城県立医療大学大学院保健医療科学研究科保健医療科学専攻博士論文	新生児の泣きに対する母親のストレス軽減と対処能力向上をめざした妊娠期における教育介入の効果を検証することを目的とした。 第1研究として、測定用具の検討と教育プログラムの作成を行った後、新生児の泣きに関する教育が、泣き声聴取時の認知・心理・生理的反応に及ぼす影響を検討するため、女子大学生18名を教育群と対照群に無作為に割り付けて実験を行った。教育介入は、泣きへの理解、泣きへの対処可能感を有意に高めたが、心理的・生理的反応への影響は示さなかった。 第2研究として、新生児の泣きに関する妊娠期の教育介入の縦断的効果を検討するため、妊娠32週以降の初妊婦113名を教育群と対照群に割り付け、介入前、介入直後、産後4～5日、産後1か月に質問紙調査を行った。4回の調査に回答した77名（教育群30名、対照群47名）について分析した結果、教育群の泣きへの理解は、介入直後、産後4～5日において対照群との有意差がみられ、一定の持続効果を確認できた。
(その他) 「総説等」 1 フェミニズム理論を通じて見える世界	共著	平成11年5月	月刊ナーシング p. 78-83	母性看護学や助産学に影響しているフェミニズム的視点を概説し、女性自らが自分の問題や状況に気づき解決策を見出していくことの重要性を述べるとともに、母性看護学の教育活動への応用例を記した。 加納尚美、坂間伊津美、太田尚子、小松美穂子 (共同研究にて本人担当部分抽出不可能)
2 排尿の体位依存性に関する研究－超音波画像診断法を用いて－	共著	平成12年3月	平成9年度～平成11年度科学研究費補助金基盤(B)(2)研究成果報告書 p. 1-36	入院患者の床上排尿に対する意識と困難性、排尿体位と残尿量との関連を明らかにし、超音波による尿量測定法の有用性を検討する目的で、入院患者への聞き取り調査、看護師へのアンケート調査および健常女子を対象とした実験研究を行った成果をまとめた。床上排泄をしている入院患者は排泄を我慢したり十分出せないことから便秘や残尿を起こしやすい、床上排尿は45度から60度の半座位が身体的・精神的苦痛が少なく残尿が少ない、超音波画像診断装置は膀胱内尿量測定に有効であり、臨床的には実測値との相関が高いブラダースキャンが有用であることなどを報告した。 小松美穂子、奥宮暁子、巻田ふき、板垣昭代、坂間伊津美、初田真知子、呉勁、金久悦子、安川揚子、岡田忍 (共同研究にて本人担当部分抽出不可能)
3 妊娠・出産・育児期における家族の健康	単著	平成13年7月	健康社会学研究 p. 22-25	「家族、ジェンダー、そして健康－健康社会学的アプローチ」の特集テーマの中で、母性看護学の立場から現代家族の特徴を挙げ、それが女性の心の健康に及ぼしている影響について述べた。また、妊娠・出産・育児期にある女性と家族の健康性を高めるための具体的支援を、社会の中での支援、個への支援にわけて健康社会学の視点をふまえながら論じた。

4 有用な助産ケアを導くための助産診断教育	単著	平成16年9月	ペリネイタルケア p. 16-20	「思考過程を育む助産診断」という特集テーマの中で、助産教育においては、1)助産モデルに立脚した情報収集と思考プロセスができる、2)診断と実践をつなげた学習ができることを目標としたアプローチが重要であることについて実践内容をふまえて解説し、助産診断は有用な助産ケアに結びついてこそ役割を發揮すると述べた。
5 現代の母親の抱える育児不安・ストレス要因に対する育児グループの効果に関する研究	共著	平成18年3月	平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C・2))研究成果報告書	乳幼児のいる母親の育児不安・ストレスの要因を把握し、育児グループ活動の効果を明らかにするため、フォーカスグループインタビューや質問紙調査を用いて行った研究成果をまとめた。半数以上の母親が何らかの不安を抱えており、育児不安は夫や家族の問題、メディアからの育児情報などに影響されることを明らかとし、育児グループへの参加により育児不安やイライラが有意に減少して育児に余裕を持って向きあうようになること、ソーシャルネットワークが有意に増加することなどを報告した。 松田宣子、高田哲、坂間伊津美 p. 15-39
6 乳幼児を持つ母親の就業継続過程における葛藤・ストレスモデルの構築	単著	平成19年3月	平成16年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書	働きながら子育てをする過程での母親の葛藤・ストレスを明らかにし、モデルとして視覚化することを目的として面接調査、質問紙調査を用いて行った研究成果をまとめた。仕事と育児の両立過程における葛藤・ストレスとして「仕事を休むことへの葛藤」をはじめとする6カテゴリーを明らかにし、家庭、職場、地域社会による総合的アプローチの必要性を述べた。また世帯種類と母親の就業状態は有意に関連することから母親の両立葛藤モデルを夫の有無別に検討した結果などを報告した。 p. 1-71
7. 【臨地実習の再構築「学ぶ機会」を取り戻す臨床と教育の連携】(Part2)教育機関の取り組み事例 コロナ禍の臨地実習をとおしてこれからの考える	共著	令和3年7月	看護展望46(9) p. 905-902	コロナ禍において所属大学が直面した臨地実習の問題を述べ、学生の学ぶ機会を取り戻すために取り組んだ実習内容・方法の準備や工夫、実習施設との調整などについて具体的に報告した。 村井文江、坂間伊津美、菅原直美、沼口知恵子、池内彰子、黒田暢子、田村麻里子
「学会発表等」				
1 家族機能における夫役割一夫役割に対する妻の期待と現実の不一致について一	一	平成6年9月	第35回日本母性衛生学会学術集会(於東京)	家族機能を測定するFFFS尺度を用いた質問紙調査を通して、妊婦の夫役割に対する期待と現実の不一致について検討した内容を発表した。
2 育児ストレインの規定要因に関する検討一都内ベッドタウンに在住する乳幼児を持つ母親の調査から一	一	平成8年5月	第5回日本健康教育学会学術集会(於東京)	(学術論文)①の項に記した研究概要の一部について発表した。
3 看護ケアシステム導入後3ヶ月間の評価一初期的障害の分析から一	一	平成9年6月	第13回看護情報システム研究会(於東京)	看護情報システム稼働してから3ヶ月間に生じた初期的障害を分析し、システム運用が安定していく過程について検討した内容を発表した。
4 妊娠期および子育て期における女性の尿失禁予防に関する研究	一	平成9年10月	第38回日本母性衛生学会学術集会(於鹿児島)	産褥早期の女性を対象とした質問紙調査を通して、妊娠・産褥期における排尿トラブルの実態、女性自身の尿失禁に対する知識や捉え方・対処方法について検討した内容を発表した。
5 女性の排泄の体位依存性一超音波画像による測定一	一	平成9年10月	第38回日本母性衛生学会学術集会(於鹿児島)	(学術論文)⑦の項に記した研究概要の一部について発表した。
6 育児ストレインの規定要因に関する研究一乳幼児を持つ母親の子育て支援に向けて一	一	平成9年10月	第56回日本公衆衛生学会学術集会(於横浜)	(学術論文)④の項に記した研究概要の一部について発表した。
7 看護ケアシステム利用状況の評価	一	平成9年11月	第17回医療情報学連合大会(於神戸)	看護情報システム稼働後3ヶ月と7ヶ月時点でのシステム利用状況について、看護師に質問紙調査を行い、①コンピュータ操作に対する自己評価、②システムの機能別習熟度、③システム利用に対する意識を検討した内容を発表した。

8 母子看護学におけるリプロダクティブ・ヘルス/ライツの教育方法：学習者主体の教育方法導入の試み	—	平成11年10月	第40回日本母性衛生学会 学術集会（於横浜）	（学術論文）③の項に記した研究概要の一部について発表した。
9 茨城県における助産婦活動と需給見通しに関する基礎調査	—	平成12年3月	第40回日本助産学会学術集会（於鹿児島）	（学術論文）⑥の項に記した研究概要の一部について発表した。
10 育児期の母親の自己評価、育児不安、及びエゴグラム（第1報）自己評価、及び育児不安とエゴグラム・プロフィールパターンとの関連	—	平成13年9月	第42回日本母性衛生学会学術集会（於大阪）	（学術論文）⑨の項に記した研究概要の一部について発表した。
11 育児期の母親の自己評価、育児不安、及びエゴグラム（第2報）エゴグラム・サブカテゴリー得点による自己評価、及び育児不安の予測	—	平成13年9月	第42回日本母性衛生学会学術集会（於大阪）	（学術論文）⑩の項に記した研究概要の一部について発表した。
12 青年期女性の月経随伴症状とライフスタイル	—	平成13年9月	第42回日本母性衛生学会学術集会（於大阪）	（学術論文）⑫の項に記した研究概要の一部について発表した。
13 育児休業取得の有無に影響する要因	—	平成15年10月	第44回日本母性衛生学会学術集会（於栃木）	働く母親への質問紙調査を通して、育児休業の取得状況及び休業取得への影響要因を検討した内容を発表した。
14 育児グループに参加している母親の育児不安・ストレスの分析	—	平成16年10月	第63回日本公衆衛生学会学術集会（於島根）	フォーカスグループへの半構成的インタビューを通して乳幼児を持つ母親の育児不安、ストレスを検討した内容を発表した。
15 育児における満足感・楽しみの関連因子の検討	—	平成17年3月	第19回日本助産学会学術集会（於京都）	3歳児を持つ母親への質問紙調査を通して、育児における満足感・楽しみの関連要因を検討した内容を発表した。
16 女子高校生のダイエット行動と健康知識との関連	—	平成17年10月	第46回日本母性衛生学会学術集会（於宮崎）	女子高校生240名を対象とした質問紙調査を通して、ダイエット行動の現状および健康に関する知識との関連について検討した内容を発表した。
17 育児と仕事の両立に関連する要因—乳幼児を育てる母親への調査から—	—	平成18年6月	第26回茨城県母性衛生学会学術集会（於水戸）	仕事を継続しながら乳幼児を育てている母親への質問紙調査を通して、母親の背景要因および健康状態について検討した内容を発表した。
18 母子看護学におけるグループ学習の体験	—	平成18年6月	第26回茨城県母性衛生学会学術集会（於水戸）	（学術論文）⑬の項に記した研究概要の一部について発表した。
19 育児不安、ストレス測定及び要因に関する研究	—	平成18年10月	第65回日本公衆衛生学会学術集会（於富山）	4か月児、9か月児を持つ母親への質問紙調査を通して、育児不安・ストレスの程度とその関連要因を検討した内容を発表した。
20 仕事と育児の両立過程における母親の葛藤・ストレスの経験	—	平成18年11月	第47回日本母性衛生学会学術集会（於名古屋）	働きながら乳幼児を育てている10名の母親への半構成的インタビューにより、仕事と育児の両立過程における葛藤やストレスの経験について質的に分析した内容を発表した。
21 学生が捉える「母子の健康に関する社会状況」とメディア利用の実態	—	平成19年10月	第48回日本母性衛生学会学術集会（於つくば）	学生のレポート分析と、学生への質問紙調査を通して、学生が母子の健康に関連する社会状況として捉えていることは何か、また学習にどのようにメディアを利用しているかを検討した内容を発表した。
22 育児と仕事の両立葛藤と母親の背景要因との関連	—	平成19年12月	第27回日本看護科学学会学術集会（於東京）	保育園児を持つ母親822名を対象とした質問紙調査により、育児と仕事の両立を葛藤を明らかにし、就業状態や夫の有無など母親の背景要因との関連を検討した内容を発表した。
23 リプロダクティブヘルスをテーマとした学習の自己評価～学習のプロセスの視点から～	—	平成20年11月	第49回日本母性衛生学会学術集会（於千葉）	学生82名のレポート分析を通して、リプロダクティブヘルスを題材としたグループ学習の自己評価について検討し、学習プロセスでの教員の介入方法を検討した内容を発表した。

24 産後1ヶ月を過ぎた母親の母乳育児継続に関する要因	一	平成21年6月	第28回茨城県母性衛生学会学術集会（於水戸）	（学術論文）⑯の項に記した研究概要の一部について発表した。
25 高校生の性に関する意識—男女の考え方の違いから性教育のあり方を考える—	一	平成22年6月	第29回茨城県母性衛生学会学術集会（於水戸）	（学術論文）⑱の項に記した研究概要の一部について発表した。
26 周産期の子どもの死に直面した看護職へのメンタルケア 母子との関わりの中で抱く思いから	一	平成22年11月	第51回日本母性衛生学会学術集会（於金沢）	産科経験6年以上の助産師を対象としたインタビュー調査により、周産期に亡くなった子どもやその家族と関わる中で看護職が抱く思いを明らかにし、看護職へのメンタルケアのあり方について検討した内容を発表した。
27 看護系大学生の研究遂行過程における学習体験	一	平成24年12月	第32回日本看護科学学会学術集会（於東京）	（学術論文）⑳の項に記した研究概要の一部について発表した。
28 産褥期の母子に対する看護実践能力を高めるための映像型教材の開発	一	平成26年3月	第28回日本助産学会学術集会（於長崎）	（学術論文）㉑の項に記した研究概要の一部について発表した。
29 母性看護における看護実践能力に対する学生の意識—周産期看護過程に映像教材を用いる効果—	一	平成26年9月	第55回日本母性衛生学会学術集会（於千葉）	看護大学3年次生33名を対象とした無作為割り付けによる介入調査により、周産期にある母子の紙上事例をもとに作成した映像教材での学習を従来の看護過程演習（紙上事例展開とロールプレイ）に加える方法が、看護実践能力を高める教育方法として有効かを検討した内容を発表した。
30 新家族員（新生児）の誕生に伴う父親役割を促すための看護の実際と影響要因の検討	一	平成26年9月	第55回日本母性衛生学会学術集会（於千葉）	助産師を対象とした質問紙調査より、新家族員（新生児）の誕生に伴う父親役割獲得を促すための看護の実際と影響要因について検討した内容を発表した。
31 新家族員（新生児）の誕生に伴う祖父母およびきょうだいの役割獲得を促すための看護の実際と影響要因の検討	一	平成26年9月	第55回日本母性衛生学会学術集会（於千葉）	助産師を対象とした質問紙調査より、新家族員（新生児）の誕生に伴う祖父母およびきょうだいの役割獲得を促すための看護の実際と影響要因について検討した内容を発表した。
32 総合病院で働く助産師の組織コミットメントに関連する要因	一	平成26年11月	第34回日本看護科学学会学術集会（於名古屋）	関東圏内の助産師1140名を対象とした質問紙調査により、総合病院で働く助産師の組織コミットメントに関連する要因を明らかにし、助産師の離転職防止や就労支援の具体的方策を検討した内容を発表した。
33 母性看護学実習前後での学生の看護実践能力に対する自己評価	一	平成27年12月	第35回日本看護科学学会学術集会（於広島）	大学3年次生33名を対象とした質問紙調査により、母性看護学実習前後における学生の看護実践能力に対する自己評価の変化を検討した内容を発表した。
34 新たに孫を迎える祖父母に対する役割獲得に向けた準備教育プログラムの有効性の検討	一	平成28年3月	第30回日本助産学会学術集会（於京都）	祖父母の役割獲得準備を目的として作成した教育プログラムを祖父母12名を対象に実施し、その効果について質問紙調査により検討した内容を発表した。
35 乳児の泣きに対する女子大学生の理解と対処可能感	一	平成28年10月	第57回日本母性衛生学会学術集会（於東京）	看護系大学1・2年次の女子303名を対象とした質問紙調査により、乳児の泣きに対する理解と対処可能感について検討した内容を発表した。
36 客観的技術試験（OSCE）における教員による評価と学生の自己評価の分析と課題	一	平成28年12月	第36回日本看護科学学会学術集会（於東京）	OSCEにおける教員の評価と学生の自己評価の差の有無について評価表を用いて分析し、効果的な学習方法につなげるための課題を検討した内容を発表した。
37 高校生を対象にした1コマのデートDV予防に関する講義の有用性	一	令和2年8月	第39回日本思春期学会学術集会（WEB）	（学術論文）㉒の項に記した研究概要の一部について発表した。

38 初妊婦を対象とした新生児の泣きに関する教育介入の縦断的効果	一	令和2年12月	第40回日本看護科学学会学術集会（WEB）	正常な妊娠32週以降の初妊婦を教育介入群と対照群に割り付け、産後1か月までの4時点で縦断的質問紙調査を行い、新生児の泣きに関する教育介入の効果を検討した内容を発表した。
39 高校生を対象にした1コマのデートDV予防に関する講義の有用性		令和3年9～10月	第40回日本思春期学会学術集会（WEB）	ヘルスリテラシーに注目し、講演会によって高校生がデートDVに関する情報を収集して予防行動につなげることが可能か評価することを目的に、介入群6校、非介入群6校（2227名）における縦断的調査を行った結果を発表した。
40 高校生におけるデートDVおよび予防に関する意識と行動 デートDV行為としての認識とされたくない行為は関連するか		令和3年9～10月	第40回日本思春期学会学術集会（WEB）	高校13校で質問紙調査を行い、高校生のデートDVおよび予防に関する意識と行動について検討した内容を発表した。
41 初産婦における新生児の泣きへの理解が産後の認知・心理的要因に及ぼす影響		令和3年12月	第41回日本看護科学学会学術集会（WEB）	妊娠後期の初妊婦を教育介入群と対照群に割り付けて新生児の泣きに関する教育を行い、「泣きへの理解」が産後4～5日目および産後1か月における認知・心理的要因に及ぼす影響を検討した内容を発表した。